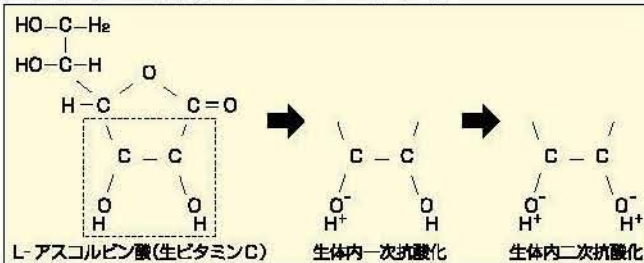
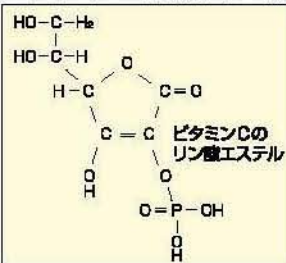


■ビタミンC(分子量 176.13・C₆H₈O₆)

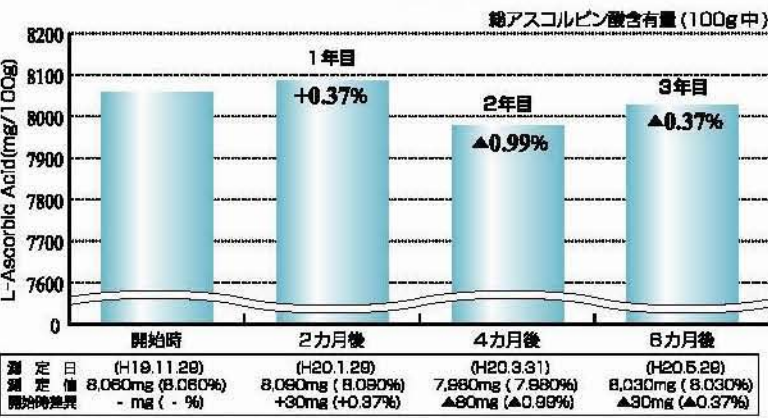


■ビタミンC誘導体の一例



「ビタミンCはもともと知名度が高へ、もう誰も誤解の多い成分」。専断家の話を聴くたびにそれがビタミンCの「アスコルビン酸」だという結論にたどり着く。たゞそれ、ビタミンCの溶液の色は「モモン色」(黄色)と聞かされてきている人が多い。しかし、実際のビタミンC溶液は無色透明な液体。市販されているビタミンC飲料の「黄色」は着色料によるものが大半で、本来のビタミンC溶液は、空気に触れると、数週間と時間が経つうちに茶褐色に変化してい

■LaⅢ VitaminC(A4b-Ⅲ・VC8) 3年間安定化試験



LaⅢ VitaminC(L-アスコルビン酸)含有量 40℃加速試験結果。試験原料係分後査。(財)日本食品分析センター調べ

昨年の秋から行った 40℃の加速度試験(検体は 8%濃度)では、11月末時点で 100g 中のアスコルビン酸量 8060mgが、3年後に相当する5月末で 8030mg、減少率を 0.37%にとどめ、3年間の安定化を立証。

たとえば、リン酸やパルミチン酸などのビタミンCに結合した「ビタミンC誘導体」を皮膚に塗布した場合、毛細血管中の酵素が化合物(リン酸)を外す役目を担ってくれるが、血液に浸透しない場合「ビタミンC誘導体」は「ビタミンC」のまま、表皮層のメラノサイトへ届ける必要がある。しかし、製品化にはいくつかの問題があった。ひとつは、水溶性のビタミンCは、角質層と顆粒層を隔てるバリテリンを通過することができないため、メラノサイトの表皮層まで浸透しない。皮膚は安全で肌により成分を選択的に透過させる作用を持っているが、表皮層からコラーゲンを生成する真皮層にまで成分を届けるためには、皮膚を組成する性質に近く、浸透性の高い脂溶性成分でなければならぬ。この条件を満たした上で、ビタミンCを「ビタミンC」のまま配合する(たとえば、ビタミンCの反応性の高さを活かした究極の化粧品ができた)。こうした結論から開発はスタートした。

開発は5年弱かけ、ビタミンCのアスコルビン酸(Ⅰ)の一切の化学処理を行わない特殊製法を編み出すことに成功。脂溶性の溶解成分にはバーム椰子由来のグリセリンを使用。濃度

リソウ 国内随一の技術で配合 美容液「ビタミンC生命体」を開発

「ビタミンCはもともと知名度が高へ、もう誰も誤解の多い成分」。専断家の話を聴くたびにそれがビタミンCの「アスコルビン酸」だという結論にたどり着く。たゞそれ、ビタミンCの溶液の色は「モモン色」(黄色)と聞かされてきている人が多い。しかし、実際のビタミンC溶液は無色透明な液体。市販されているビタミンC飲料の「黄色」は着色料によるものが大半で、本来のビタミンC溶液は、空気に触れると、数週間と時間が経つうちに茶褐色に変化してい

「ビタミンC誘導体」と呼ばれる技術がいかなかった。最初に出されたのが「ビタミンC誘導体」と呼ばれる技術がいかなかった。最初に出されたのが「ビタミンC誘導体」と呼ばれる技術がいかなかった。最初に出されたのが「ビタミンC誘導体」と呼ばれる技術がいかなかった。

■ビタミンC生命体とは

1	水溶性ビタミンC誘導体	リン酸型ビタミンC(AP)、ビタミンCリン酸が結合、リン酸型アスコルビン酸(リン酸アスコルビン酸)がある。国内地方のVCO-ローションやイオン導入の原料として使われる。	生体内で分解されるとL-アスコルビン酸に酸化
2	脂溶性ビタミンC誘導体	成分名テトラヘキシルアザアスコルビル(VC1-P)、ビタミンCに油分が結合した。ジェル、クリームで使われる。	生体内で分解されるとL-アスコルビン酸に酸化
3	生ビタミンC	糖液や多価アルコールなどの安定化成分で混合した。美容液で使われる。	?
4	ビタミンC生命体	L-アスコルビン酸型ビタミンC、100%植物由来原料で、バーム椰子由来のグリセリンに溶解。7~8%濃度で長期安定化した。ジェルで使われる。	L-アスコルビン酸として約3年間安定